

昆虫という多くの女性たちが忌み嫌う不可解な物体に一生を捧げてしまおうとする愚かな人種を称して「虫屋」と呼ぶ。また、その虫屋の中にもそれぞれ自称・専門分野というテリトリーがある。

ヘラクレスやコーカサスなど子供たちの憧れの的やオオクワガタを一千万円で落札したという虫屋最大の愚かな伝説を持つ「甲虫屋」の世界。美しいがために最も人口の多い「蝶屋」の世界（私は蝶屋のはしくれ）。その他、「カミキリ屋」「蛾屋」そして何と「ハエ屋」なるものまで存在するのだ。虫屋の世界は昆虫の数だけ無限に広がっている。

「えー、やだー。キモチわるーい！」と罵声(ばせい)が聞こえてきそうだが、その愚かな人種の内訳をみると、意外にも大学教授、医者、教師、会社役員など、それなりの社会的立場を隠れ蓑にしている輩(やから)が多い。風俗店のオーナー、住職、音楽家(私はギタリストのはしくれ)などの変種もいるが。

「じゃあ昆虫の魅力って何なの？」

## 民報

# サロシ

## 虫屋なるもの



渡辺 浩

虫屋にとって、この質問こそが最も手強い天敵である。言葉や文章では何とも説明し難い。あえて言うなら、男性が女性に女性が男性にひかれるようなものなのである(かなりの無理があったかも)。どうしてもその魅力を知りたいのなら、実際にネット(捕虫網)を片手に、フィールドを駆け回ってみるしかない。

ネットを振る。入ったか逃がしたか。ネットの中でガサゴソとごめごめその珍虫を確認した途端、至上の喜びが湧き上がり、ニッターと顔が變形してしまうのである。そう、これが虫屋の醍醐味なのだ。

家を着くと何気なく新聞の見出しが目に入る。「珍蝶絶滅の危機に。原因は蝶マニアの乱獲か!」「ゲゲッ。犯人はブルドーザーじゃなくて、この俺か」。踏んだら蹴(け)ったりの一日である。こうなると悲しみが怒りに変わり、いいビールを開けてしまおう。「蝶がいなくなると本当に困るのは虫屋のはずなのに、何でもあんな近くを探せばまだゼフィルスたちは居るはずだ。よし、気を取り直して新しい生息地を探そう。さあ明日はどこに行こうかなあ」とルンルン気分です本目のビールに手をつける。

晴れ渡る大空の下(全身スブヌレもよくあるが)、ハーハーゼーゼー、汗を滝のように流し、疲れ果て、四つんばいに崩れ落ち、ふっと視線を上げると、なななんと、探し求めていた珍虫が目の前の葉っぱの上にちょこんと。「今これを逃したら俺は死んじゃう」という人生最大の緊張感と重圧の中で思いつきりネ

ながら早朝の道を軽やかなハンドルさばきで走る。「ゲゲッ。何だこれは」去年は確かにゼフィルス(緑色に輝く小さな蝶)が舞っていたはずの林が無い。そこはもう巨大なブルドーザーたちによって茶色のただの平面と化していた。これでもうこの地域でゼフィルスたちの舞いを見ることのできないのかと、ガクッと肩

を落としながら家路に就くのであった。家に着くと何気なく新聞の見出しが目に入る。「珍蝶絶滅の危機に。原因は蝶マニアの乱獲か!」「ゲゲッ。犯人はブルドーザーじゃなくて、この俺か」。踏んだら蹴(け)ったりの一日である。こうなると悲しみが怒りに変わり、いいビールを開けてしまおう。「蝶がいなくなると本当に困るのは虫屋のはずなのに、何でもあんな近くを探せばまだゼフィルスたちは居るはずだ。よし、気を取り直して新しい生息地を探そう。さあ明日はどこに行こうかなあ」とルンルン気分です本目のビールに手をつける。

(石川町北町、会社員)